

例会のお知らせ (2)

第10回航空気象のシンポジウム

日時：昭和36年3月15日(水)午後1時より

場所：東京国際空港オペレーション・センター会議室

主題：航空機の着氷とタービュレンスについて

第2部研究発表講演

1. 石丸順一郎(仙台航測)：仙台空港の地上風について(10分)
2. 山本芳政(東京航気)：レーダー・エコーによるタービュレンスの予報について(15分)
昭和35年7月~12月までの6ヶ月間に関東地方の周辺で観測された約100回のタービュレンスとレーダー・エコーとの関係を見出し、今後レーダー観測の結果をタービュレンスの予報に応用しようとするものである。
3. 山田直勝(東京航気)：飛行機観測報告に基づく航空機のタービュレンスと着氷の発現について(15分)
昭和30~33年までの4年間に東京 FIR 内で集積された約5万回に及ぶ飛行機観測報告の中からタービュレンスと着氷の観測された約1500回をえらびその発生域、発生高度、発生時刻、発生時の飛行状態および雲の状態などを調べた。
4. 杉本 豊(東京航気)：クリア・エアー・タービュレンスに関する予報法について(30分)
ジェット機によるクリアエアータービュレンスの観測報告を分類した結果タービュレンスは30,000ないし35,000ft.の高度で最も多く観測され、発生地域のシノプティックパターンは気圧の谷、ジェット流中の風速最大域で最も多く観測されるが、こゝではRichardsonによる判定基準の各因子の大きさとタービュレンスとの関係を求め実際の予報に役立たせる

いくつかの予報則を見出した。

5. 横関 徹(日本航空)：低層におけるクリア・エアー・タービュレンスの可能性について(10分)
極地域においては、非常に低い高度にジェット気流の見られることが、SASの航空士によって報告されている。この原因はいろいろあるが、地上付近の北極寒冷気団が、低層に作る擬似的な圏界面に関係する場合や、大規模な閉塞前線に起因する場合などが考えられる。後者の場合を断面図解析を用いて示すと共に、低層におけるクリア・エアー・タービュレンスの可能性を示す。
6. 光野 一(東京航気)：着氷の予報(20分)
Godeske によって示されたように着氷は断面図上では状態曲線と-80線とで囲まれた高度で発生するのでこの方法を700mb天気図に応用して着氷区域を求め、実際観測された着氷の発生場所を調べたところ殆んどが一致した。
7. 横関 徹, 松田盤久(日本航空)：1960年3月15日の雷雨解析(15分)
1960年3月15日に関東西南部を襲った雷雨は、航空機運航に大きな影響を与えたが、その模様を解析し、発散解析を行なった。この結果、発散のパターンが雷雨のない穏かなどきの海陸風に伴う発散パターンと類似していることを示す。
8. 村上 博(仙台航測)：東京-仙台-札幌間の飛行状態について(10分)

注 なお講演追加申込のある方は下記宛に願います

東京都大田区東京国際空港東京航空気象台
上松 清

昭和36年度月例会(第2部)スケジュール*

名 称	日時	申 込 締 切 日	受 持 委 員 其 他
山の気象	6月	4/30日	高層課：大井
高層気象	6月	4/30日	高層課：大井
乱流と低層気象	6月	4/30日	測器課：竹内
梅雨について	7月	5/31日	研究所：松本
(数値予報・綜観気象)			予報課：石原
気象学史と気象教育	8月	6/30日	研修所：渡辺
生気候	9月	7/31日	研究所：神山
大気汚染	9月	7/31日	研究所：神山
気象災害	10月	8/31日	研究所：渡辺
台風について	11月	9/30日	
(数値予報・綜観気象・災害・レーダー)			研究所：松本
			予報課：石原
			研究所：渡辺

名 称	日時	申 込 締 切 日	受 持 委 員 其 他
風のシンポジウム	11月	9/30日	測器課：竹内
気象電気	12月	10/30日	研究所：今井
気候	1月		長期予報：朝倉
太陽活動	1月		長期予報：朝倉
気象統計	1月		長期予報：朝倉
観測と測器	2月		測器課：竹内
大気大循環	2月		予報課：石原
長期予報	2月		長期予報：朝倉
前線について	3月		予報課：石原
(綜観気象・レーダー)			
航空気象	3月		東京航空：上松

注 表中空欄は決定次第順次うめてゆく。

*第1部 一般研究発表 毎月の例会に行ないますから講演題目、所要時間、

アブストラクトをつけて下記へ申込むこと。

宛先 東京都杉並区馬橋 気象研究所 今井一郎